



太陽の子

さいたま市立常盤小学校だより
令和6年2月号(第12号)
令和6年2月1日発行

【学校教育目標】

心身ともに健康で 思いやりの心もち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

喜んで登校 満足して下校

【めざす児童像】

- よく考える子
- 思いやりのある子
- たくましい子
- かかわりあいを大切にする子

入学試験の思い出

校長 三島 公夫

1月のある朝、駅前を緊張した面持ちで歩いている中学生たちがいました。高等学校の入学試験を受けるため、会場に向かう中学3年生です。この日に備えて準備をしてきた受験生。全員の努力が報われることを願わずにられません。私は「力をすべて出し切るんだぞ!」と、応援メッセージを送りながら受験生たちを見送っていました。

多くの方が経験する入学試験。皆さまにも様々な思い出があることでしょう。試験が終わった時の解放感。でも、結果が出るまでのモヤモヤした気持ちもあって……。試験日から発表日までは、この二つの気持ちが交錯します。私の場合、後者の方が強かったように思います。友人とおしゃべりをしていればモヤモヤした気持ちを忘れて過ごせたものの、一人になるとモヤモヤ感は増大するばかりでした。他の人は平常心でいるのだろうか? どうしたら冷静になれるのだろうか? と考えているうちに、ますますモヤモヤした気持ちが高じていくのを感じました。どうしようもない不安に耐える時間でした。

「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」という言葉をご存じですか? 直訳すれば「否定的な能力、負の力」ですが、「答えの出ない事態に耐える力」とか、「すぐに答えを出さず、迷ったり悩んだりする“モヤモヤする力”」こそが大切だという考え方のことです。近年、この考え方がクローズアップされ、テレビや新聞でも取り上げられています。現代は何事にも効率性が追求される傾向にあります。「成果を出すことが何よりも大事」という意識も強いようです。課題に直面した時に、「ここが問題だ」とか、「これが解決策だ」と結論を急ぎがちです。でも、早く答えを出すと見落とすこともあります。そこで、ネガティブ・ケイパビリティの考え方では、結論が出たとしても答えを一度保留して、「本当にそうか?」、「違う見方はないか?」と考え続けることが大切だということです。このことによって、同じ結論だったとしても深みが出てくるのだそうです。そもそも、どうなるか分からないという状況に耐えること自体が貴重な経験と言えます。

当時を振り返ると、合格発表までの時間で「試験に向けて精一杯努力した。そこに悔いはない」、「今はどうすることもできない、どうにもならない」と考えられるようになりました。答えの出ない事態に耐え、うまく時間をやり過ごすことで、覚悟を決めることができました。

子どもたちの周りには、人間関係やこれからどう生きるかなど、すぐに答えの出(せ)ないテーマがたくさんあります。効率性を上げただけでは解決しないこともしばしばです。大切なことは、不安に耐えながらも、すぐに答えを出せなくても、問題の解決に取り組み続けることなのだと思います。そして、私たち大人のやるべきことは、悩むことは当たり前だと伝え続け、性急に「正解」を求めずに傾聴とサポートを続けていくことなのではないでしょうか。五木寛之さんは「不安は人を支えていく大事な力である」と言いました。イチローさんは「結果が出ない時、どういう自分でいられるかが一番大事」と言っています。嘸みしめたい言葉です。